権香淑著

『移動する朝鮮族

エスニック・マイノリティの自己統治』

彩流社, 2011年

本書は、権香淑氏の10年を超える調査研究に基づく労作である。著者は朝鮮族の移動が東北アジア近現代史の展開と不可分であるという認識を抱き、朝鮮族の日本への移動を事例の中心として、考察を進めていく。

序章では、作業仮説が提示される。それは、「朝鮮族の移動とネットワーク形成のダイナミズムは、東北アジアの政治・経済・社会的な地域構造によって生み出される一方、朝鮮族の歴史的経験に根ざした〈エスニック・マイノリティの自己統治〉という営為にある」(59、以下、本書からの引用はページ数のみを記す)というものである。

第1章では、朝鮮族に関する先行研究が、批判 的に検討される。まず、中国の「国民」という立 場を重視する〈ナショナル・アプローチ〉につい て、「中国政府や共産党一国主義の枠を乗り越え てはいない | (78) などの指摘がなされる。次に、 「朝鮮族を民族関係から捉える」(90)という〈エ スニック・アプローチ〉の限界として、著者は「エ スニシティ状況が実は国家間関係に規定され、そ れらを反映させる鏡となっている逆説的な側面を 見逃してしまう」(90)と述べ、〈エスニック・ アプローチ〉は、「異民族間における関係を捉え る際には極めて有効であるが、同民族間における 差異の問題を捉えきれない」(92) として、韓国 に移動した朝鮮族が、過酷な労働と差別によって 抱く韓国人への反感を例示する。これは、朝鮮族 の移動の背景にあるグローバリゼーションとエス ニシティ状況との緊張関係を説明できないという、 著者が指摘する〈エスニック・アプローチ〉の「第 三の限界」につながるものである。

このような〈エスニック・アプローチ〉の限界 を克服するために、著者はウォーラスティンが提 唱する「世界システム論」における「共同性

(peoplehood) | (構成員が帰属意識をもつ集団) 概念と朝鮮族を繋ぐ試み、すなわち〈グローバル・ アプローチ〉を提示する。資本主義世界経済が中 核一半周辺一周辺の三層構造(インターステイト・ システム) によって構成され、その構造が固定的 でないことに注目する筆者は、〈グローバル・ア プローチ〉によって、朝鮮族を資本主義世界経済 という問題領域に位置付けることにより、その社 会編成及び変容を理解しようと試みる。「中国が 世界システムに組み込まれる契機(19世紀半ば) と、中国において朝鮮族が生成する契機(19世 紀後半)とが連動しており、煎じ詰めて言えば、 朝鮮族は、資本主義世界経済のダイナミズムとそ の内的矛盾から生成してきたと捉えることも可能 である」(109) という指摘には、示唆されるとこ ろが多い。

第2章では、アンケート及びヒアリング調査 (2005年10月~2006年2月実施)によって得ら れた定量的データを使用して、日本における朝鮮 族の生活実態の一断面が紹介される。一例を挙げ ると、調査当時の在留資格が「就労」である48 名中、来日時の在留資格が「留学」だった者が 16名、「就学」だった者が17名を占めること、 調査当時の在留資格が「留学」である82名中、 来日時の在留資格が「就学」だった者が31名を 占めること(130)などから、「就学」から「留学」 「就労」、「留学」から「就労」という、朝鮮族の 日本における定住化の流れがうかがえる。また、 家庭におけるコミュニケーション言語に関する設 問への回答の多様さは、朝鮮族の文化資本として の言語(朝鮮語・漢語・日本語)の多様性を反映 しており、極めて興味深い。

第3章では、質的調査に基づき、朝鮮族を日本 に向かわせる送り出しメカニズムおよびネット

ワークの様態、朝鮮族の日本への移動を可能にす る資源としての文化資本、グローバル化に伴う朝 鮮族社会の二極化現象と階層化の問題という三点 について考察が行われる。まず、朝鮮族の移動に おいて、エスニック・コミュニティが重要な役割 を果たしていることが指摘される。そして、「最 も近くて安く行ける先進国 | (158) という理由で 留学先に日本を選ぶ事例や、「アルバイトしなが ら日本語学校に通え、大学にも行けるという話に 魅了されて来日を決意する | (159) 事例などが紹 介されている。そして筆者は、このような送り出 しメカニズムとネットワークに加えて、かつて「満 州国 | と呼ばれていた東北三省の朝鮮族中学校・ 高校における第一外国語が日本語であるという状 況などから、日本語・日本文化に対する理解が、 朝鮮族にとって、日本への移動を可能にする資源 としての文化資本であることが示される。評者は 約二年間(1998年9月~2000年8月)、延辺朝 鮮族自治州の延辺大学日本語学部で教鞭をとった 経験があるが、朝鮮族学生たちの相当数が、卒業 後、日本を目ざして出国していった。グローバル 化によるダイナミズムは、朝鮮族社会における二 極化を促進している。滞日歴に準じて日本社会の 構成員として在留資格を持ち、権利を行使する朝 鮮族がいる一方で、「非正規就労者」として劣悪 な労働環境で長時間労働を強いられる朝鮮族もい る。「就学」ビザで在留する者の場合、学費・生 活費の工面に追われ、ビザの更新ができないまま 「非正規就労者」となってしまう事例も少なくな く、未熟練労働を目的に、韓国企業が進出してい る第三国に中国から移動し、その後来日する朝鮮 族も存在するため、朝鮮族社会における階層化傾 向が強まることを、筆者は示唆している。

第4章では、前近代・近代・現代における朝鮮族の移動の歴史を概観し、移動の動因について、朝鮮の植民地化などの歴史的背景や、植民地支配からの解放、中華人民共和国の成立、中朝関係の変化、中韓国交樹立という国際状況の変化に加えて、朝鮮族の「移動の文化」という要因が作用している可能性も示されている。中国東北部に居住する朝鮮人(朝鮮族)は、「朝鮮人、韓人、日本人、満洲国臣民、中国人」(225)、「朝鮮族(中国)、

韓国系中国人または在中同胞(韓国)、在日外国 人(日本)」(225)という他称性の変遷が示すよ うに、東北アジアの地域構造によって、そのあり ようが、深く規定されてきた。著者は、「朝鮮族 の移動に関わる歴史的な文脈や、中国における朝 鮮族の位置づけが如実に表れていると思われる | (229) 事例として、移民三世代に位置づけられる 40代男性のインタビュー事例を紹介している。 この事例を通して筆者は、朝鮮語を母語として育 ち、「朝鮮族であること」に疑問を抱かずに成長 した彼が、朝鮮の歴史を自主的に学ぶ過程におい て「朝鮮族であること」を省察するようになり、「朝 鮮族が『中華民族』の一員であるという認識に疑 問を抱くようになった」(239)と述べている。そ して、植民地時代に旧日本軍人として関東軍に属 していた祖父に対する彼の思いや、韓国人が使用 する「韓民族」ということばへの違和感、10年 以上居住している日本に対する複雑な感情などが 紹介されている。著者はこの事例について、彼が 「日々、朝鮮族として行為遂行的に人生を歩んで きたが、グローバル化に伴う多様な他者との出会 いによって、『当事者』性が再構成されている | (241) として、「東北アジア諸国間で共有されて いない歴史の狭間における過去の出来事 | (241) が、彼にとって、現在および未来の生き方に影響 を及ぼす重要な変数であると指摘している。

第5章では、日本に居住する「在日本中国朝鮮族」によるエスニック・コミュニティの歴史と現状が紹介され、「見えない社会集団」から「見える社会集団」への実践について述べられている。エスニック集団としての「在日本中国朝鮮族」について筆者は、ローカルなレベルでの自文化の凝集性が、新たなビジネス・チャンスを生み出していることを紹介し、移動前と移動後の階層的な異相関係が朝鮮族の「脱/再エスニシティ化」に影響を与えており、他のエスニック集団との関係においては、相対的なマジョリティ/マイノリティの力学関係を反映した「我々」認識の不在が自集団の価値化につながり、「再エスニシティ化」の方向が強まる可能性について言及している。

終章ではこれまでの考察をふまえて、作業仮説 で述べられた〈エスニック・マイノリティの自己 統治〉について言及される。近現代を通した政治・ 経済・社会的な力学の中でマイノリティ化されて きた朝鮮族は、それに抗うかのように移動し、ネッ トワークを形成し、コミュニティを作り、現在を 生き抜いている。著者は朝鮮族によるこのような 主体的な営為を「生きるための工夫」と表現して いる。これが〈エスニック・マイノリティの自己 統治〉である。東北アジアにおける朝鮮族の移動 を著者は単なる「越境」とはとらえず、境界に跨 るという意味において、〈跨境〉ととらえている。 著者は朝鮮族を「治者の変遷によって他称され続 けてきた人々。にもかかわらず、東北アジアとい う地域での平和的な共存方法を、歴史的な記憶と 移動の経験を通して身体化し具体化している人々。 そしてその方法を自らのあり方をもって実践して いる人々 | (334) と表現し、〈エスニック・マイ ノリティの自己統治〉が平和のモデルであり、〈跨 境〉が共生のモデルであるという新たな作業仮説 を提示して本書を結んでいる。

このように示唆されるところの多い本書において、気になる点をいくつか指摘しておきたい。まず、中国における朝鮮族社会の解体問題である。著者はこれについて、朝鮮族が経験する現在の移動を、他の研究者の観点に立脚すればと仮定した上で、「解体どころか『跨境生活圏の拡大』という意味づけになる」(218)という見解を示しているが、評者が延辺に滞在していた当時(1998年9月~2000年8月)においても「労務輸出」問題は、しばしば報道などで取り上げられていた。朝鮮族の移動の出発点に関わるこの問題に関しては、より精緻な検証が必要ではないかと思われる。

次に、第4章におけるインタビュー調査事例について、著者は調査対象者が「朝鮮族であること」の省察を進めるなかで、「朝鮮族」という他称が彼の中で「全く否定され」(239) たと記述しているが、少々極端な表現ではないだろうか。漢族の友人や同僚からの「何気ない言葉」が、マジョリ

ティ(漢族)からのマイノリティ(朝鮮族)への「まなざし」を逆読みさせたという記述はあるが、「全く否定され」という記述に説得力を持たせるためには、彼自身の言葉による語りや、その他のエピソードなどを紹介する必要があるだろう。

用語の問題と言葉の誤用についても指摘しておきたい。「家庭での言語と配属関係のクロス表」 (136) などにおいて、著者は漢語を「中国語」と表記しているが、周知のとおり、延辺朝鮮族自治州においては、朝鮮語と漢語が公用語であるため、延辺という地域内においては、朝鮮語も「中国語」である。したがって、本書における「中国語」という表記は「漢語」にすべきであり、「三か国語」 (136) という表現も「三言語」とするべきであろう。また著者は「全て」という意味で「すべからく」という言葉を使っている (238) が、「すべからく(須らく)」は「ぜひとも」という意味を持つ言葉なので、この用法は適切ではない。

繰り返すが、本書は示唆されるところの多い労作である。前述した作業仮説と新たな作業仮説が「東北アジアの平和的共存」に結びつくという考察の深さと視野の広さに、評者は大いに刺激を受け、自らの浅学と怠惰を深く恥じた。また、第5章において紹介されている著者による朝鮮族コミュニティの観察記録は、「在日本中国朝鮮族」という「見えない隣人」(288)の姿を活写している。朝鮮族研究、エスニック・マイノリティ研究の新たな地平を開いた著作といえよう。

(綛谷智雄 神戸医療福祉大学)

〈参考文献〉

総合智雄 2002.「延辺朝鮮族の社会学的研究―エスニシティに対する接近を中心に―」『アジア研究』第48巻第2号。

紹谷智雄 2006. 「『国境を越えた民族の社会学』に向けて一在韓華僑・在韓日本人妻・延辺朝鮮族を概観して一」『第一福祉大学紀要』3号。